

使徒の働き13章1-12節 「宣教旅行の始まり」

1A 主によって送り出す教会 1-3

1B 指導者の背景の豊かさ 1

2B 聖霊による命令 2

1C 礼拝の中での言葉

2C 召しのための聖別

3B 按手 3

2A 霊の戦い 4-12

1B バルナバとのつながり 4-5

2B 偽預言者との対峙 6-12

1C 賢明な総督の付き人 6-7

2C 信仰の妨げ 8

3C 小さき者パウロ 9

4C 悪事に対する裁き 10-11

5C 御力の伝道 12

本文

使徒の働き 13 章を開いてください。今朝は、13 章 1-12 節を一節ずつ見ていきたいと思います。ついに、使徒の働きが本格的な異邦人宣教の場面に入っていきます。エルサレムにある教会が、新たに生まれたアンティオキアにある教会を支援しました。バルナバを遣わし、そしてバルナバは、タルソにいるサウロを捜し、彼もやって来て、教師として教会を建て上げていきました。飢饉が起って、ユダヤ地方にいる兄弟たちに支援物資を送り届けるために、バルナバとサウロが遣わされました。その間、ヤコブが殉教して、ペテロも殺されかけましたが御使いが救い出した奇跡がありました。祈り会がマリアという人の家で行われ、その息子がマルコです。彼は、バルナバの従兄弟です。バルナバとサウロは、マルコを連れてアンティオキアに戻りました。

こうやって、アンティオキアの教会が、生まれて、育てられ、建て上げられただけでなく、同じ兄弟たちを助けるほどの力を持ちました。そして 13 章からは、この教会が宣教師を遣わす教会になることです。ホライズン・クリスチャン・フェローシップという教会がアメリカのカリフォルニア州サンディエゴにあります。マイク・マッキントッシュという、カルバリーチャペル・コスタメサの教会で救われた人が、サンディエゴで教会を始め、大きくなりました。彼は宣教の働きに力を入れています。そこに「伝道学校」というものがありました。そのモットーは、「魂を勝ち取り、弟子にして、送り出す」というものです。伝道することによって、人々が救われます。そして救われた人々は、キリストの弟子になるべく訓練を受けます。そして、弟子として整えられた者が遣わされるのです。救われて、

弟子となり、そして遣わされる。この三つのことが、教会には起こります。今、みなさんの多くが救われていて、救われているということは、弟子となり、そして遣わされるという流れの中にあるのだ、ということです。

1A 主によって送り出す教会 1-3

1B 指導者の背景の豊かさ 1

¹さて、アンティオキアには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどの預言者や教師がいた。

「さて」とルカは言っていますが、アンティオケの教会が建てられてから、数年が経過していると思います。その間に、ここに名を連ねているような指導者が建てられていました。一人は、「バルナバ」です。キプロス出身のレビ族のユダヤ人であり、彼がエルサレムから遣わされた人であり、主な指導者になっています。

次に、「ニゲルと呼ばれるシメオン」とあります。ニゲルはラテン語ですが、彼はそう呼ばれていたということは、「肌が黒い人」であったと思われます。イエス様の十字架を担いだクレネ人シモンではないか？という意見があります。そうすると、北アフリカから来た人になります。彼もユダヤ人です。ユダヤ人といっても、離散の地に住む人々は混血もあることから、皮膚の色も違ってきました。今、イスラエルに行けば、白人のユダヤ人もいれば、アラブ人と区別のつかない中東系のユダヤ人もいて、そして黒人のユダヤ人もいます。

それから、「クレネ人ルキオ」がいます。ローマ帝国は北アフリカにまで領土を拡大していましたが、クレネは地中海に面する大きな都市でした。今のリビアにあり、世界遺産にも登録されています。彼もユダヤ人ですが、ギリシア文化を背負ったヘレニストのユダヤ人だと考えられます。初めにギリシア人に福音を伝えたのは、「キプロス人とクレネ人」でした(11:20)。

そして、「領主ヘロデの乳兄弟マナエン」がいます。マナエンはユダヤ人の名前ですが、旧約聖書でのヘブル語では「メナヘム」と言います。北イスラエル王国の王にその名の人がありました。「乳兄弟」とは、血縁関係はないけれども、同じ人のお乳で育てられた人同士のことです。マナエンは、イエス様が公生涯の時にガリラヤとペレアを治めていたヘロデ・アンティパスと一緒に育てられました。ヘロデ・アンティパスは、バプテスマのヨハネを斬首した人間です。イエス様の裁判では、この方を侮辱した人です。その人物と共に育てられながら、なんとマナエンはイエスを主と信じ、受け入れました。それだけでなく、今、ここアンティオキアの教会で指導者となっています。

そして、最後の登場するのが「サウロ」です。彼は、タルソ出身のユダヤ人で、生まれつきローマ市民権を持っています。そしてエルサレムに行き、ガマリエルの下で律法の教育を受け、厳格な

パリサイ派になりました。最高法院の一員だったとも言われています。その彼が今、自分が迫害していた道を宣べ伝える者と変えられています。

いかがでしょうか、このようにアンティオキアの教会の指導者たちは、いろいろな背景のある人々で構成されています。アンティオキアという町自体が非常に国際的であり、大都市だったので、こうなっていたとも言えますが、それにしても、パウロがこう言っていたのを思い出すのです。「ガラ 3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」

ところで教会には、このようにキリストがお立てになる指導者たちがいます。ここでは預言者また教師となっていますが、エペソ4章には五つの職が書かれています。「4:11 こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。」これまで私たちは、使徒たち、ピリポのような伝道者、またアガポや、ここに出て来る預言者たち、そして、牧師また教師がいます。指導する賜物が与えられる中で、教会全体がキリストの身丈へと成長することができます。

2B 聖霊による命令 2

² 彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が「さあ、わたしのためにバルナバとサウロを聖別して、わたしが召した働きに就かせなさい」と言われた。

1C 礼拝の中での言葉

バルナバとサウロが、宣教の働きに遣わす命令を聖霊によって与えられています。ここでの状況は、「彼らが主を礼拝し、断食している」ということでした。「礼拝」をしているとありますが、これは、主に仕えていると言い換えることができます。私たちは、主に仕えるということがどういうことか、あまり具体的に思い浮かべることができないかもしれませんが、旧約聖書では、祭司たちが幕屋や神殿の中で仕えている姿があります。あれが、主に仕えるということの具体的な姿で、礼拝していることです。このことに集中している時に、特に断食をしているとありますから、時間をかけて、集中して礼拝していた時に、聖霊からの語りかけがあったということです。

主に召されること、何が主のみこころであるのか？ということ、キリスト者は問います。けれども、その問いの背後に、どうしても「自分はどうするのか？」として、自分が主語になっていて、それ自体が神のみこころを求めることを否定してしまっています。自分がどうするのか？ではなく、神が何を命じておられるのか？なのです。みこころは、主人である神がこうなさいということに、「はい」と従順に応答することに他なりません。ですから、礼拝をいっぱいするのです。主を主とすること、この方をあがめること、そして仕えること。その中で、神が自分に対する御心を示されます。

ところで、具体的に聖霊が言われたということは、どのような状況でしょうか？物理的に、天から語られたということもあるかもしれませんが、ここでは、「預言者や教師がいた」とあるので、預言という形で語られたのでしょう。パウロがテモテに対して励ましの言葉を語っている中で、第一の手紙でこう言っています。「4:14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある賜物を軽んじてはいけません。」預言と共に、御霊による賜物が与えられたのです。それは、彼にとっては牧会をするための賜物、教える賜物、また伝道者としての賜物でしょう。聖霊がこのように、人の預言を通して語られることがありますし、私たちも求めていくべきです。

2C 召しのための聖別

そして、「わたしのためにバルナバとサウロを聖別して」と言っていますね。聖別とは、神の目的のために別たれるということです。主のお働きのために、その人生やすべてのものが他のものから別けられるということです。パウロは、ガラテヤ書でこう言っています。「1:15 母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが(口語訳)」聖別された、選り分けられて、それで召されています。そして、「わたしが召した働き」と聖霊は言われていますが、パウロは回心した時に既に主ご自身から教えられていました。弟子アナニアに語られています。「9:15-16・・・あの方はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」

皆さんお一人お一人が、それぞれの場で神によって救われ、それはその場に神によって召されたということが出来ます。これまでと同じことをしているかもしれませんが、職業も変わらなければ、もちろん家族の環境も変わりません。けれども、主に選り別たれ、主に仕えるように召され、また周囲の人々に証しを立てるように遣わされているのです。

3B 按手 3

³そこで彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。

祈りの中で断食が強調されています。旧約聖書においても、ダニエルが断食をして祈っていると、三週間後に、主の使いが来て、ダニエルに終わりの日の大いなる戦いの幻を見せました。エステルが王の前に、ユダヤ人を救ってくださるようになり、またハマンが悪事を働いていることを暴露するために出て行く時に、三日間の断食をユダヤの民に命じました(4:16)。悪霊を弟子たちが追い出せなかった理由として、「マルコ 9:29 祈り(と断食)によらなければ、何によっても追い出すことはできません。」と言われました。断食というのは、霊と肉の養いを逆転させることです。私たちが絶えず自分の肉体を養っているけれども、霊への養いがおろそかになりがちです。そこで、それを逆転させて、食べることを絶つことによって、霊への養いに集中ができます。そして、御心を求める時に、断食をしている場面が出てきます。

そして「手を置いて」います。これは旧約聖書では、いけにえの牛に手を置くところから始まっています。手を置くのは、牛がその人と一体化したことを意味しています。それで牛が屠られますが、それは本来、自分が主の前に血を流さなければならないところ、牛が身代わりになったからです。そこで、アンティオキアの教会の人々は自分たちもバルナバとサウロと共に、宣教の働きの一部になっているのだということなのです。宣教の働きは、遣わされる者だけでは成り立ちません。遣わしているキリストの体があり、そのつながりによって初めて可能になるものです。

そして、「送り出した」とあります。このギリシア語は、解き放つというような意味合いがあります。そうです、バルナバとサウロは賜物のある人々で、アンティオキアの教会が手放したら惜しいはずですが、けれども、いつまでも抱え込まず、主にあって手放す必要があります。宣教の働きというのは、主からの強い促しで、一つ所にいてはいけない、災いだという切迫感が与えられ、そこから一気に、主の言われるままに解き放たれるということなのです。思い出すに、アメリカで学んでいたときに、その時の滞在のビザを永住権に変える手続きをしましょうか？と弁護士の人から誘われました。私はアメリカ生活がとても気に入っていました。キリスト者としての生活をするのに、人間的な見方では、日本よりもはるかに整えられています。どうしても、ここにいてはいけないという切迫感がありました。それで出て行ったのです。

2A 霊の戦い 4-12

1B バルナバとのつながり 4-5

⁴ 二人は聖霊によって送り出され、セレウキアに下り、そこからキプロスに向けて船出し、⁵ サラミスに着くとユダヤ人の諸会堂で神のことはを宣べ伝えた。彼らはヨハネも助手として連れていた。

ルカは、「聖霊によって送り出され」といって、聖霊による送り出しを強調していますね。アンティオキアの町には、オロンテス川が流れていますが、その下流 25 ㎞先に港があり、それがセレウキアでした。彼らの宣教旅行の始まりは、「キプロス」です。セレウキアから約 200 ㎞のところにあります。地中海上にいくつかの島がありますが、キプロスは三番目に大きいです。キプロスというのは銅という言葉から出たのではないかと言われます。古代からフェニキア人が住み着き、キプロスのラルナカという町は、旧約聖書で「キティム(イザヤ 23:1)」と呼ばれています。貿易が盛んな島となりました。新約時代には、ローマの一地方になっていて、栄えていました。

なぜ、彼らがキプロスを選んだのか？それは、バルナバの出身地であるからでしょう。彼はそこに畑があって、所有していました。それを売って、財産を使徒たちに渡したことを見ました。キプロス出身のユダヤ人は多くいます。「サラミスに着くとユダヤ人の諸会堂」とあるように、そこにはユダヤ人が多く住んでいたことが分かります。このキプロス出身のユダヤ人の何人かが、アンティオキアでギリシア人にも福音を伝え始めたのです。ですから、キプロスはいろんな意味で、太いつながりがあるのです。

神は、そのようなつながりを用いられます。私がアメリカから日本に戻って、それで宣教師としての支援を受けるようになりました。ある兄弟が、「あなたは日本人なのに、どうして日本への宣教師なのですか？」と言われたことがありました。素朴な疑問ですね、国や言語、文化を超えたところに行くのが普通、宣教師ですから。私はそこでバルナバとパウロのことを挙げたのです。宣教の働きとして、バルナバの出身地に戻り、またパウロの住んでいたトルコのところに彼らは宣教旅行に行ったことを言及しました。カルバリーチャペル沖縄のリックさんも、米軍基地で生まれ育ち、アメリカ本土に戻りましたが、故郷である沖縄に戻って教会を開拓しました。こうしたつながりを、神は用いられます。

そして、彼らは、「サラミス」に着きましたが、キプロスの東海岸にある町で、ローマ時代、キプロスでは最大の都市で、経済活動の中心地でした。当時の遺跡もきっちり今も残っています。彼らは宣教旅行において、大きな都市を訪れています。アンティオキアがその一つですし、小アジアではエペソがそうでしたし、ギリシアではピリピも大きく、コリントも大きな貿易都市でした。そしてパウロは、ローマに行くことが神に予め告げられていました。大きな都市に行き、特に貿易が盛んなところに行った時に、それと共に主のことばも飛躍的に広がっていきました。私たちは大都市のど真ん中にいます。大都市には、いろいろな課題があるでしょう。また世の栄えや誘惑も大きいです。けれども、その中に神のみこころがあり、失われた魂を探す主の情熱があります。

そしてサラミスで、「ユダヤ人の諸会堂で神のことばを宣べ伝えた」とあります。これがパウロの一行の宣教のパターンになります。新しいところに行く時に、必ずユダヤ人の会堂、シナゴグを探します。そこで礼拝を献げるのではなく、伝道のために行きます。ここに、「宣べ伝えた」とありますね。そこには、ユダヤ人だけでなく、異邦人でユダヤ教に改宗した改宗者、また周りには神を畏れる異邦人も集まっています。福音を語ると、ユダヤ人も信じていきますが、反対する人たちも多く出ました。けれども異邦人が信じて、神をほめたたえています。こういったことが続いて、異邦人への宣教が進んでいきました。パウロはこう述べました。「ローマ 1:16 福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」ユダヤ人に初めに語り、それからギリシア人にも、すべての人に救いをもたらされるということです。

ここで、バルナバのいとこであるマルコが、バルナバとサウロの助手として来ています。次回見ますが、キプロスを巡回した後に脱落して、エルサレムに帰ってしまいます。

2B 偽預言者との対峙 6-12

1C 賢明な総督の付き人 6-7

⁶島全体を巡回してパポスまで行ったところ、ある魔術師に出会った。バルイエスという名のユダヤ人で、偽預言者であった。

パポスは、サラミスとは島の正反対にあり、南西の海岸にある町です。当時のキプロスの首都であり、今もとても栄えており、その町自体が世界遺産登録されています。バルナバとパウロは、サラミスで福音を伝え、それから島全体を巡回して、それでこの正反対のところまで来ました。

そこに、反対者が現れました。魔術師で、「バルイエスという名のユダヤ人で、偽預言者であった。」とのこと。皮肉なことに、「イエスの息子」という意味であり、本物に似せている名前です。

福音宣教において、妨げは付き物です。旧約時代、モーセとアロンがファラオの所に行った時に、そこに魔術師がいたことを思い出してください。彼らの妨げによって、モーセとアロンの語ることばを、ファラオは聞き入れませんでした。彼らの行う奇跡と同じような奇跡を行い、対抗しました。しかし、ついに真似できなくなり、最後は、膿によって自分たち自身が神に打たれました。パウロはテモテに、その名前を挙げて、「Ⅱテモ 3:8 たぶらかしている者どもは、ヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らっており、知性の腐った、信仰の失格者です。」と断じています。そして、サマリアにて、魔術師シモンがペテロのところへやって来て、自分が手を置いたら誰でも聖霊を受けられるように、その権威をくださいと言って、お金を持ってきたのですが、ペテロははっきりと、「8:21 お前の金は、おまえとともに滅びるがよい。おまえが金で神の賜物を手に入れようと思っているからだ。」と言いました。神の働き手の偽物になろうとしているので、それで厳しく責めました。神のなさることを、偽物によって真似して妨げようとする仕業に対して、神は厳しい扱いをされます。

⁷ この男は、地方総督セルギウス・パウルスのもとにいた。この総督は賢明な人で、バルナバとパウロを招いて神のことばを聞きたいと願った。

地方総督とありますが、ローマの元老院によって任命される総督でプロコンスルと呼ばれます。ちなみに、総督と呼ばれる人々、例えばピラトは、ローマ皇帝によって任命されて、プロクラトルと呼ばれます。地方総督の「セルギウス・パウルス」ですが、紀元 52 年から 58 年までの頃の碑文に彼の名が記されています。このようにルカの書いた福音書や使徒の働きは、歴史に対してとても忠実な書物になっています。

そして、バルイエスはこのセルギウス・パウルスのもとにいました。当時、総督が助言者をそばに置くことは普通でした。先ほど見た通り、ファラオは魔術師を置いていましたし、また、ダニエルは、バビロンの王ネブカドネツアルに対して、そのような助言者でした。セルギウス・パウルスがユダヤ人であるバルイエスを置いたのは、少なからずユダヤ教に興味があったからでしょう。異邦人であっても、イスラエルの神を敬う人々がいたということは、コルネリウスの話でも学びました。

それで、「この総督は賢明な人」とあるのは、真実をかぎ分ける力というか、お付きのバルイエスだけでなく、他のユダヤ人で神の言葉を伝えている者たちからも聞きたいと願ったのです。公平に、

正確に知りたい、真実を知りたいと思う心があったので、賢明な人とルカは呼んでいます。みなさんも、信仰に至った中で、いろいろな教えや考えがあっても、それでも福音のことは聞いてみようとして、信仰を持たれたのだと思います。聖書はこれを、「賢明」と呼んでいるんですね。

2C 信仰の妨げ 8

⁸ところが、その魔術師エリマ(その名を訳すと、魔術師)は、二人に反対して総督を信仰から遠ざけようとした。

ファラオの魔術師を先ほど話しましたが、彼はエリマという別名が付けられていたぐらい、魔術をしていたということです。そして、二人に反対して総督を信仰から遠ざけようとしています。こうした行為に対して、神は厳しく取り扱われます。イエス様が、小さき者を躓かせるならば、どうなるか、教えられましたね。「マタ 18:6 わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首にかけられて、海の深みに沈められるほうがよいのです。」しかし、誰かが福音を信じようすると、こうした妨げの力、悪魔の仕業が強く動きます。

3C 小さき者パウロ 9

⁹すると、サウロ、別名パウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけて、

ここからついに、サウロという名に代わる、パウロという名が出てきます。サウロはユダヤ人の名前ですが、パウロは、ローマでの愛称です。これから、異邦人の世界での宣教となるため、彼はパウロで知られていくこととなります。意味は、「小さき者」です。パウロはおそらく、このことを誇っていたでしょう。私はキリストにある小さき者だということを。

そして、「聖霊に満たされ」という大事な言葉が出てきます。使徒の働きに何度となく出て来ますが、例えば使徒ペテロは、最高法院において尋問を受けた時に聖霊に満たされて、イエスの名他には天下に、救われるべき名としてはないと大胆に宣言しました。同じ聖霊に満たされて、彼は偽預言者ににらみつけ、厳しく対峙し、神の力を現すこととなります。

4C 悪事に対する裁き 10-11

¹⁰こう言った。「ああ、あらゆる偽りとあらゆる悪事に満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。

悪意と偽りに満ちている者です。悪魔の力によって魔術を行っていて、それで悪魔の子と呼ばれています。正義と呼ばれているものとは反対のことを行う、正義の敵です。そして、主のまっすぐな道とありますが、正義と言い換えると真っ直ぐという意味です。その真っ直ぐになっているものを曲げようとしています。

信仰を持つとも思うものを妨げたり、信じている者につまずきを与えようとするものなら、使徒たちは容赦ありませんでした。ペテロは第二の手紙で、偽教師たちについてあらゆる呪いの言葉を書いています(2章)。そうやって強く臨み、対峙するのです。羊飼いの役目を思い出してください、羊を養います。それだけでなく狼から羊を守ります。この後者の働きが必要なのです。

¹¹ 見よ、主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる。」するとたちまち、かすみと闇が彼をおおったため、彼は手を引いてくれる人を探し回った。

光を闇に変えて、神の裁きが現れました。「しばらくの間」とありますから、後には見えるようになったのでしょうか。ここに、神の憐れみがあり、彼にも悔い改めの機会が与えられたのではないかと思います。思えば、パウロも回心の時に、一時、目が見えなくなりました。彼も福音を妨げようとしていました。そこで神は目を見えなくさせて、彼の心が変わるようにされて、そして回心した彼に、再び光を見させました。

5C 御力の伝道 12

¹² 総督はこの出来事を見て、主の教えに驚嘆し、信仰に入った。

ここでの「主の教え」とは、権威と力の現れた教えです。バルナバとパウロが語っていた福音が、単なる言葉ではなく、人を救う神の力であるということ、本質は言葉以上に力であることを知ったからです。イエスご自身が、罪が赦されたと宣言された後に、中風の者を立ち上がらせて、神の教えの確かさを現されました。パウロはコリント人への手紙第一でこう話しています。「I コリ 2:4 そして私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。」御霊と御力の現れだったのです。ですから、皆さんの信仰が人々に伝わる時に、それは、言葉による説得によるものではなく、皆さんご自身が聖霊によって変えられている、その神の力の裏付けがあるからです。そして、絶えず霊の戦いがあることを知ってください。「II コリ 10:4 私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神のために要塞を打ち倒す力があるものです。」